

(1) 民主政治のしくみ

③ 政党政治の分類

分類	概要
多党制	多数の政党が主導権をめぐって争いが単独で政権を担当できない（小
二大政党制	2つの大政党が互いに政権の獲得を争う。政局が安定するが政権交代
一党制	一政党のみが政党として認められ、その存在が否定。

今号の先生

社会科
小林真也先生

大学の経済学部卒業後、新潟県の高校教員に。2020年より新潟大学大学院に進み、現在も学校現場で授業実践をしながら、博士課程で社会参加学習や探究学習を研究している。現任校では、今年度は2学年主任を担当。また、陸上部顧問も務めている。

社会問題へのアプローチの仕方を学び
多様な当事者と交わって解決策を磨く

表層的な活動にならないよう
まずは問題への理解を深める

地域課題解決型の学習で、生徒は「自分たちの提案で解決できる」と本気で思っているのだろうか。小林真也先生は、探究学習や公民科の授業で地域課題に関わるなかで、そんな疑問を募らせた。大人に付度し、「こう言えば喜ぶんじゃないか」という解決策を挙げて活動していないか。学校で地域課題の解決に挑むことが、かえって「自分で社会を変えられると思う」という意欲や自信を削いだりしていないか。

高校生に地域課題の解決は無理、と言いたいのではない。むしろ小林先生は「高校生はもつとできる」と思っている。力を発揮しきれないのは「授業の立てつけがまだ良くないから」と感じているのだ。

「学習環境が整わないまま生徒を地域課題に向き合わせ、結果、表層的な活動に追い込んでいくように感じたのです。そうさせている自分が本当に嫌でした」

だから課題解決の力がつくような公民科の単元授業の開発を目指した。前任校でまず実践したのが次の2つの授業だ。

① 食品ロスの「社会的ジレンマ」

生徒が資料を読んで食品ロスの現状を把握。グループごとに3つの架空の解決策から一つを選択し、提案の準備をする。その提案に対し、農家、パン屋、スーパーマーケット、子ども食堂などの当事者から評価をもらい、解決策を再検討した。

「社会問題の捉え方は個々の立場によって異なり、個々の利益と社会全体の利益

は往々にして衝突する。その社会的ジレンマを把握してもらうのがねらいでした」

② ヤングケアラーの「因果関係」

ヤングケアラーの動画視聴後、グループで資料を分担して読み、原因と結果を構造化して整理する「問題系図」を作成（図1参照）。背景には複数の原因とその奥にさらなる原因が存在し、問題が望ましくない未来も生む、という全体像を捉えた。「ある社会問題は『何が原因で起こり、結果どうなっているか』。その因果関係をきちんと捉えることが、適切な解決策を考える土台になると思うのです」

生徒たちの考えた提案が
本当に社会を変えうるように

現在の新潟県立新津高校に赴任してからは、次の2つの単元授業を開発した。

③ 自主防災組織の「顕在化前の問題」

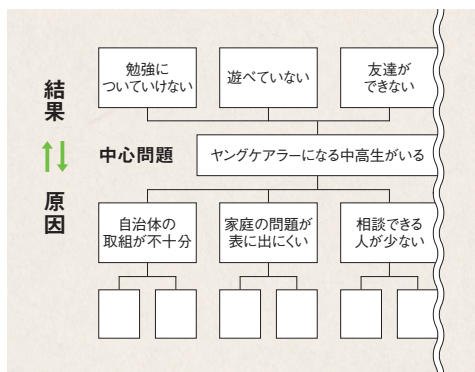
全国で増加傾向の自主防災組織に「参加率が低い」という隠れた課題があるのを捉え、「問題系図」と「目的系図」を作成（図2参照）。望ましくない現状から、望ましい状態を描くことで解決策を探った。

「広く認識された社会問題は深刻化している解決が難しく、対症療法になりがちです。顕在化前の問題も積極的に発見し、解決する姿勢を培いたいと考えました」

④ 福祉避難所の「現行政策の改善」

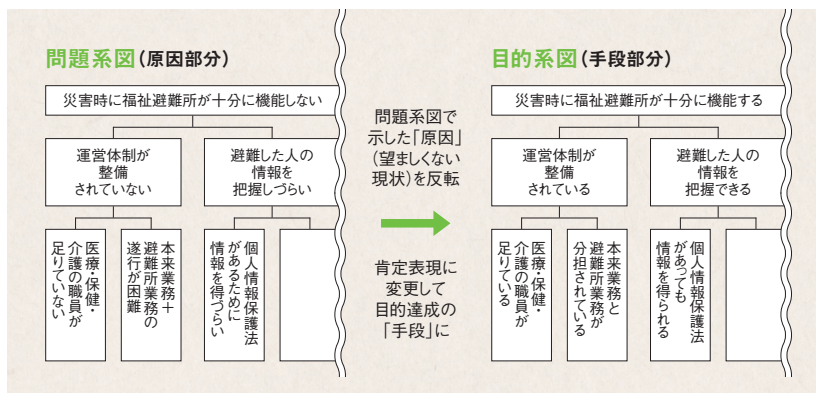
福祉避難所は、災害時に一般避難所の生活が困難な高齢者や障害のある人、乳幼児などを受け入れる施設。十分に機能しなかった事例があり、解決策を問題系図・目的系図で考え、地元の福祉避難所

図1 問題系図を生かした問題分析



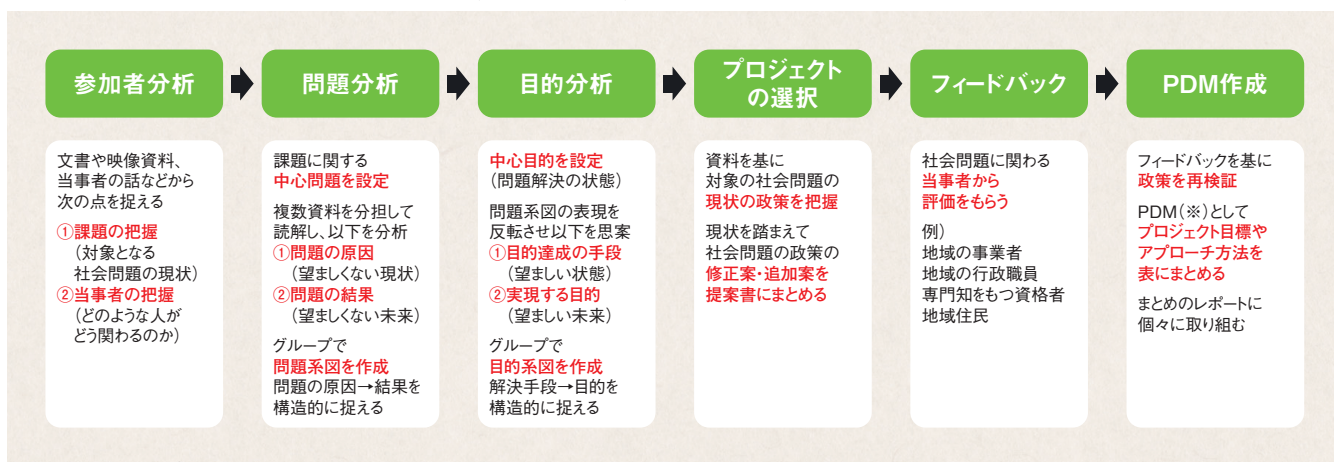
生徒が作成した問題系図を編集部が一部抜粋・編集。実際の授業では、問題の原因についてはさらに深掘りして階層的に捉えるところまで行っていた(例えば「自治体の取組が不十分」である原因の一つとして「状況を把握できていない」ことを一段下に記載する、というように)

図2 問題系図を基にした目的系図の作成

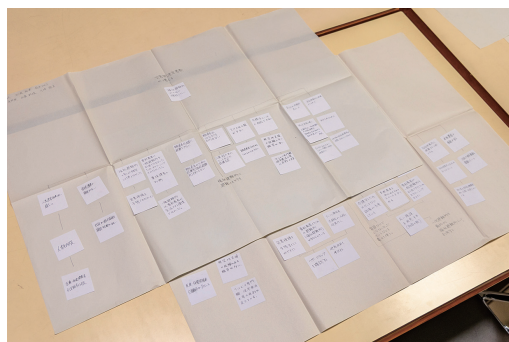


生徒が作成した問題系図・目的系図を編集部が一部抜粋・編集。問題系図の「原因」を肯定表現に反転させると、目的(課題が解決した状態)に向かう具体的な「手段」が浮かび上がってくる。実際の授業では、このページの左下の写真のように、より多くの原因や手段があげられていた。

図3 地域社会の課題解決を図る授業の計画一例(6～8コマ想定)



※PDM……プロジェクト・デザイン・マトリックスの略で「プロジェクト計画概要表」とも言われる。国際協力や社会政策の現場で活用されている



問題系図と目的系図。社会参加学習の先行実践例や、社会問題の解決手法を、小林先生が幅広く研究するなかで見いだした手法だ。

に関する政策も調べて改善案をまとめた。「現行政策の改善を図る提案なら、政策の妥当性は高まり、当事者の方々の議論もよいかみ合います。それによって生徒の社会参加も促されると考えました」

小林先生はこうした実践で、図3のような地域課題解決の授業を構築してきた。重視してきたのは、生徒の解決策に、課題に関わる当事者からフィードバックをもらい、さらに考えを深めることだ。扱う題材ごとに当事者となる団体や人を学校周辺で探し、協力を仰いできたという。

「公共政策学を研究する秋吉貴雄先生の言われる『非専門家の知識』という言葉が好きなんです。例えば国の政策は、経済政策にしる社会保障政策にしる、専門家の意見を取り入れていて、おそらく論理的には相応に正しいと思われる。ですが、正論なら皆が受け入れるかといえば、現実



課題解決ではない、政治のしぐみの学習など普通の授業でも、「なぜこうなったと思う?」と因果関係を問うことを大事にしているという。

にはいろいろな批判が噴出します。特定分野の専門家の知識だけでなく、その社会問題に関わってくる多様な当事者の『普通の知識』『現場の知識』も加わってこそ、政策は社会全体で受容しやすいものになり、政策の質も向上する、というのです」

生徒が今後、仕事や私生活でより本格的に自分たちの地域課題を周囲と話し合うことになったとき、「自分の主観や気持ちだけで『こうしたほうがいいんじゃないか』と発言する『ようでは、立場が異なる人との議論は平行線に終わり、時間や労力をいたずらに消耗する。そうではなく、『各方面の情報にきちんとアクセスし、集めた情報を基に現状把握や問題分析を行い、論拠をもって、妥当性・実現性のある解決策を提案する』ようになってほしい。そのような姿勢で社会参加する素養を、公民科の授業で育もつとしているのだ。

● 因果関係の解明に焦点を絞った探究学習

1. リサーチ・クエスチョンの作成

- 「興味がある分野のキーワード」＋「推移」「変化」などの語句でネットで画像検索を行い、グラフや表の統計資料を収集
- 統計資料の分析を生かして「なぜ～なのか」の問いを設定

2. 先行研究分析・仮説の設定

- 自分たちのリサーチ・クエスチョンに関連する論文をJ-STAGEで検索
- 論文の「要旨」「はじめに」を読み、その内容をグループ内で共有したうえで仮説を設定（関心がある分野の研究対象や研究手法を知る機会にもなる）
- 仮説検証のためにどのようなデータを収集するべきかを考察
- リサーチ・クエスチョン、仮説、検証方法を進捗状況報告シートにまとめる
- 進捗状況報告シートを基に大学教員からフィードバックをもらう

3. 検証

- 大学教員からのフィードバックを踏まえて情報を収集（AI活用によるデータ収集、文献調査、インタビュー調査、アンケート調査）
- 収集した情報を編集（図表の作成、統計処理など）
- 設定した仮説が正しかったかどうかを検証

4. 論文作成

- パラグラフ・ライティングの技法について説明を聞き、論文を作成
- 作成した論文を基に発表スライドを作成

ダウンロード可

進捗状況報告シート	
1. 研究テーマ（キーワード）	2. 研究目的（仮説）
3. 先行研究（論文）	4. 検証方法（データ収集）
5. 結果（図表）	6. 結論（仮説検証）



左は探究学習の進捗状況報告シート。このシートの記載を基に、高大連携協定を結ぶ4大学の教員約20名が、生徒に指導をしてくれているという。右の写真は新潟薬科大学の松本 均先生。

授業ができるまで

教科学習や探究学習を指定時間内でどう進めるか

「実は陸上の部活動指導をしたかったのが出発点で、たまたま政治・経済が得意だったので社会科学の教員になったんです」

小林先生は少しづつが悪そうに、そう語る。初任校は総合高校。週数単位を使って生徒が自分の興味・関心を掘り下げる課題研究の授業を「面白い」と感じた。次は佐渡島の進学校。生徒が島の魅力に気づき、その未来も考えていけるよう、地元の人を招くキャリア教育を提案した。さまざまな活動で地域コミュニティを支

● INTERVIEW・教科を越えたつながり

時間内で活動する生徒にも学びの質を保証できるように

現2年生の探究学習を1年次から小林先生と進めています。共感しているのは、年35時間から逆算し、無理のない計画にしたこと。仮説検証の仕方をきちんと学び、試行錯誤して探究したなら、結論が出なくてもよしとしています。放課後も探究にのめりこむ生徒もいますが、35時間で活動した生徒も十分学びが

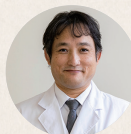
るようにしたいのです。活動中に文章の構成も学ぶので、私の担当教科の英語でいえば、入試の長文読解や、進学後のレポート作成にも生きるとしています。



英語 水戸直和先生

先人たちの知にふれることで限られた時間でも濃い探究を

小林先生の発案で、本校の探究学習ではリサーチ・クエスチョンを立てた段階で先行論文を読みます。これが非常に良かったです。生徒が今ある知識だけで仮説を立てると、思い浮かぶことは限られます。先行研究にふれ、どこまでがわかっていて、何がわからないかをまず把握すると、仮説



生物 奈良俊宏先生

についての思案も、生徒同士の議論も深まるようになりました。先行研究を踏まえた仮説設定と検証は、私の生物の授業でも目指したいことですし、社会に出てからも有用だと思っています。

える人に多数出合い、「率直に言って素敵だなと思った」という。自身も町内会活動に参加、若い人が少ないなかで「同年代の方が町内の草むしりを誰に褒められずとも毎回主導する」姿に感銘を受けた。

公民科の授業を見つめ直すきっかけは、前任校で訪れた。総合的な探究の時間と学校設定科目の週3単位で、地域課題解決型の学習をすることに。難解な地域課題に、右も左もわからないまま向き合っている、週3単位でも足りないと感じた。

「場当たりの活動になりがちで、町内会活動以上の意義があるのかな、と。子どもたちが主体的にやっているから」と批判されにくい状況にも問題を感じました」

このままでは生徒に申し訳ない。焦燥感が募るなか、大学院に進む機会を得た。半年間、内地留学をして社会科学教育を学び、以降はその知見も活かし、前ページでふれたような実践を重ねて、公民科の授業での課題解決型学習を形づくった。

さらに今の新潟高校に来て3年目より、探究学習の担当になり、その進め方も模索した。文武両道の進学校で生徒は多忙ななか、週1単位、年35時間で何をするか。「探究学習では、まず課題を設定しますが、これを『解決したい社会問題を定めること』と勘違いすると、年35時間で挑む生徒に過度な負担を背負わせます。課題とは解明したい問いのことで、もっと幅広いもの。本校では『生徒が興味ある事象について、何が原因で結果どうなっているかの因果関係を解き明かす』ことに絞った探究を行うようにしました（上の図版やコラムも参照）。『なぜ日本は観光客数が世界上位なのか』『なぜ数学嫌いが増えるのか』などです。まずは起きている事象を正しく把握する。そのうえで、ゆくゆくは事象にまつわる問題の解決に、社会科学的なアプローチや、自然科学的なアプローチなど、各教科の授業で学んだ手法も活かして挑んでほしいと思っています」

新潟高校（新潟・県立）



School Data

創立1921年／普通科
生徒数703人（男子338人、女子365人）
進路状況（2025年3月卒業）
大学173人、短大5人、専門学校33人、就職1人、その他9人

Outline

校訓は「学ぶは高き人の道」。県内の4大学と高大連携協定を結び、探究学習におけるデータ活用や仮説検証の仕方についても大学教員の指導を受けている。文部科学省「高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール事業）」の採択校。

生徒はこう変わる

課題分析や課題の議論に 一定の自信をもつように

前任校は進学と就職をする生徒が半々で、教科学習に苦手意識をもつ者も多かった。それでも食品ロスやヤングケアラーの授業では、当事者との関わりや問題系図の作成で「どの政策にもメリットとデメリットがある」ことや「図」にすると問題の現状や原因を捉えやすい」ことを生徒が体感。「分析力がついた」との感想も寄せられた。現任校での自主防災組織や福祉避難所の授業では、生徒が資料読解と問題系図・目的系図を基に政策を考え、当事者からの評価も得ることで、社会問題への理解が深まり、生徒の提案も具体的に現場に即したことになることを確認できた。

今と絡めて思想や政治を学び 根拠をもって社会を見つめる

——小林先生の公民の授業はどんな感じですか？

五十嵐さん 板書を全部写すのではなく、タブレットに送られてくるスライドに要点を書き加える授業です。先生の雑談が面白くて、授業で習う思想や政治のこと、今と結びつけて話してくれます。

加藤さん 教科書の内容に合わせてYouTubeの動画とか、いろいろな資料も紹介してくれます。最近のニュースを先生がどう捉えたかも話してくれて、そんな考え方もあるんだ、とためになっています。

——小林先生は探究学習にも深く関わっているそうですが、どんな探究をされてきましたか？

齋藤さん 私たちの班は、統計資料を基に「なぜ日本は観光客数が世界上位か」という問いを立て、「外国人観光客の訪日目的」を調べました。旅館・ホテルの組合にアンケートをお願いし、結果を分析して。その過程で「今後も外国人観光客を増やしたいか」は意見が割れていることがわかり、今は「その背景に何があるか」も追っています。小林先生から教わったのは「根拠もなく思い込みで語らない」「鵜呑みにせず批判的に捉える」ことです。先行研究を調べ、データを揃え、だからこう言えると論じる。こうしたやり方は、大学進学後もその先の社会でも役立つんじゃないかな、と思っています。



左より2年生の
五十嵐大雅さん、加藤 昊さん、齋藤 在さん

社会人と本音で交わり 自分の考えを深めていく

課題解決型学習や探究学習の取組で、もう一つ目指していることがある。「生徒みんなが卒業できるようにする」ことだ。「探究学習のことを校外の勉強会にも参加して学ぶなかで、今の探究に、学校に来られなくなるほどの苦痛を感じる生徒もいることを知りました。進め方がよくわからないことの不安や、その状態でグループ活動を強いられる怖さとか。だからこそ課題解決や探究に挑むなら」どの段階でどんなことをすればいいか、その解像度を上げたのです。全体の枠組を作って指導すると「主体的活動でなくなる」という考えもありますが、私はまず、すべきことが不明確な状態をなくし、生徒が安心して活動できるようにしたいと思っています」

とはいえ過保護にしたいのではない。地域課題や探究の取り組み方についてレクチャーを充実させつつ、一方で小林先生は、それら活動で生徒が考えた提案については、協力してもらう地域関係者や大学教員に「高校生だからと甘めに評価せず、ダメな点も含めて思ったことをそのまま伝えてください」とお願いしてきた。「社会人から厳しい評価をもらい、生徒がブンブン怒ることもあります（笑）。高校生が真剣に考えたことには「がんばったね」などと子ども扱いせず、こちらも本音で接し、批判もする。それが私なりに思う、生徒に対して誠実であることです」

授業作りのポイント



- ・社会問題について、原因と結果の因果関係や、個々の利益と公共の利益が衝突する社会的ジレンマを把握したうえで、社会全体が受容できるような解決策を探っていく人になってほしいと思っています。
- ・探究学習でもまずは興味ある事象を正しく把握し、そのうえで事象に絡む問題の解決に挑んでほしいです。

Point.1 /

向き合う事象を きちんと把握する

社会問題の解決策を考える公民科の授業や、探究学習では、生徒が向き合う事象の因果関係をきちんと把握することを重視している。その過程を飛ばし、思い込みを基に調査や議論をすると、出発点からズレていて徒勞に終わる。

Point.2 /

当事者からの フィードバック

生徒が社会問題の解決策を考えたら、問題に関わる多面量の当事者から評価をもらうことも大事にしている。立場によって問題の捉え方が異なることを体感し、問題への理解を深め、皆が受け入れやすい提案を再検討するためだ。

Point.3 /

主体的な活動への まっとうな批判

子どもや若者が懸命に考え、自発的に行動すると、その姿勢を讃えたいこともあって「批判されにくい状況」が生まれやすい。小林先生は外部の協力者に対して、評価を甘くせずダメ出しもしてほしいことを必ず伝えているという。

Point.4 /

問題解決を目指す 1手段として

公民科の課題解決型学習は「問題解決の一例として公共政策学的アプローチを学ぶもの」と小林先生は言う。例えば食品ロスを、自然科学や情報技術の知見を基に解決する路線もあるからだ。そんな柔軟な発想も生徒と共有したい。